

マ ラ ヤ 紀 行

吉 田 光 邦

マラヤの旅にはどこもないけだるさ、ものうさがある。あふれるばかりの緑の色、そのなかにハイビスカスや、ブーゲンビリア、さてはツルメリヤなどの花が、あざやかな色彩をたたえて開いてはいるが、そのどれもがかわらない気候の中でたえず開き、たえず散りつづける。緑の色だって同じことだ。いつもみどりは濃い、同時に黄ばんだ葉、また散ってゆく葉もたえることがない。ここでは季節という時間は停止しているかのようだ。

その止ってしまったような時間のなかに、かわらない風景、すさまじいばかりの生命力にみちた植物の世界が展開する。それはいわば充実した虚無なのだ。どこへいってもすべて生きている。だが、それらは時の流れを感じさせない。いわば永遠に生きている物ばかりによって埋めつくされた空間だ。そこには私がかつて経験した西アジアの砂漠のなかの、完全な無と静寂にみたされた虚無はない。だが、あまりにもみたされた空間、あまりにも動かず変わらぬままに充実した空間は、かえって深い虚無の様相をもつ。

このジャングルといわれる緑の空間のなかに開けた灰色の道は長く、どこまでも果てしないようにつづいている。そして、たまさかめぐりあうちいさな町、ちいさな村の、無表情に走り去る車を見送る人々の眠つきは、たしかに西アジアのオアシスに住む人びとと同じ眠付だった。なんの変化も事件も起こることなく、ただその人たちの上に人生が流れてゆく。私どもとは全く異なった人生が。

だから、究極のところ、ジャングルはあの砂漠と同様の存在なのだ。それは人間を絶望させ、人間の存在を虚しくすることからいって、全く同じものなのだ。それにしても、そのジャングルをゴム園と化したイギリスの努力はとにかく偉大だった。びっしりと整然と植えこまれたゴム園は、それ自体一個のジャングルである。ジャングルという雑多な植物の無限にも似た集合を、ゴムという単一植物を要素とした集合に置きか

えたものにすぎぬ。それはジャングルのひとつの開発の六法であった。1876年、ブラジルから輸入されたゴム苗は、ロンドンのキュー熱帯植物園に栽培された。ついでシンガポール植物園に移植された。わずか22株のゴム苗が、この新しいジャングルの最初だったのである。それが今日、全国土の12%をおおう存在になったとは誰が想像したろう。1961年度の輸出量は80万トンという。すくなくとも成功したジャングル開発の一例なのだ。

しかし、その背後には重厚なジョングルの眼がある。黙々と利潤を追いつづけ、植民帝国の建設に努力したジョングルの眼がある。シンガポールの海をのぞんで、ラッフルズの銅像は、依然たる凝視をつづけていた。むっと腕を組んだままで。そして前にひろがる美しいグリーン芝生では、クリケットのゲームが盛んに進行していた。それもラッフルズ以来の遺産なのだ。セント・アンドリュウスのチャペルの鐘が鳴る。そして港には夜が来た。

だが、私の今回の旅行の目的は、そうした感懐や思いを追うべきものではなかった。新たに開始されたマレーシア・インドネシア・プロジェクトの中心計画として、適当なフィールドとなるべき村を求めることであった。だから本題に戻ろう。それが私に与えられた課題なのだから。

1964年6月1日、朝羽田を発つ。暑い夏に似たひざしがしげやかに羽田の沖を輝かせていた。そして数時間のちには、私どもはバンコックのむっとした熱っぽい空気のなかになげこまれていた。快晴、気温は33°C。

バンコックの記憶の白日のなかで崩解をつづける旧王朝の町、アユチャ。くずれかかった煉瓦のワットのなかに、黄衣の僧たちがいくつものささやかな僧房をいとなんで暮していた。太鼓が鳴る。風もない草いきれのなかに、白いセメント製の新しい奉獻仏が、無限の沈黙をたたえている。

王宮の白い塔は、ただ緑のなかで衰滅の歌を歌う。

ふしぎなほどの静寂。黄色の寝仏は、アルカイク・スマイルをたたえて、孤独な姿を横たえている。もえさかる太陽のなかで、近くの小学校から授業の最後になえる経文の斉唱がひびいてきた。やがてそれはすっかり晴れ上がった青空のなかに吸われて消えていってしまう。巨大な寝仏の上にただひろがる青と緑の世界。それは人間を恐怖させるような時間と空間の無言の音楽だった。線香を売る老婆も昼寝のままだ。はげかかった衣裳、こわれたような冠をつけた少女たちが、まだらに化粧して観光客のために、舞踊をみせ、何がしかの金を得ている。ひとりの少年が、小さな鼓を前に置いて、まのびした調子でそれを打つ。そこにもしずかな旅情にみちた真昼の陽があった。

フローティング・マーケット。バジュックの周辺をとりまく多くのクリークのなかには、早朝から近在の物売りの舟があつまる。ここでは水路が唯一の交通路なのだ。米から野菜、果物、魚、肉の類、いっさいの生活必需品が小さな舟に積まれて家々に売りこまれる。どの家も小さな舟を必ずもち、入口はクリークに向かって開かれる。

その間を好奇の眼と多くのレンズの眼をのせた観光船がゆきかう。これはいわゆる名所でもなければ、すばらしい風景というわけでもなんでもない。それはじかにタイのひとびとの生活のなかを無遠慮にのぞきこみ、その生活の表情をかきまわる三時間のコースである。

だから、そこにみちているのは、なまなましい生活の匂い、生活の現実なのだ。ほとんど泥水に近いクリークの水で顔を洗っているひとびと、とびこんで体を洗うものもいる。やがてはいっぱいの物売りの舟、まあたらしい魚が切りさかれて家に運びこまれる。果物を買う家、ドリアンの匂いがたちこめる舟。水路を進むにつれて、朝食をとっている家が現われる。流れとともに時もたつ。やがては食器を洗っている家。また竹製品などの手仕事に女たちが働きはじめている家もつぎつぎに展開されるのだ。

その現実の生活が、まるで自分たちとは無関係であるかのように、観光船のなかから私どもは眺めている。異郷のひとたちの暮しのリアリズムを、ひとつのへだてをもってタバコを吸いながら観客席からみることは、いったい何なのか。いわゆる現代文明からはまだまだ遠い暮らしをしているひとたちを、現代文明に飽

満し、いささかのつかれさえも覚えている人間たちがながめてゆくということ。タヒチに生の充足を求めようとしたゴーガンの疲労に似たものを、船のなかの私どもは感じる。かしこにあるのは、真実の生活のリアリズム、こちらにあるのは、ただ暗い疲労。ロマンチズムにみちた旅行者はもうどこにもいそうもない。

バンコックに黄金のパゴダをまばゆいばかりに輝かすワット、プラケオ。エメラルド色の仏像が、ほの暗い堂のなかでちいさく光っていた。多くの壁画で飾られた堂内を埋めるひとたちは、一様に合掌しつつ、半ば睡ったような表情で、朗々と堂内にひびくパリ語の経文に聞きいつている。堂内もまた外の回廊も石だたみとなって、ひんやりと涼しい。菩提樹のふかい木かげ。どこにも多くの人たちがじっと座って聞えてくる経文に耳をすませる。それはふとあの西アジアのイスラムのモスクで祈る人々を対称的に思い出させた。彼等は声高らかにアラーの名を誦しながら、身を投げ出して祈りつづけていた。いくつもの動きをともなうあのイスラムの祈りに集まるひと。それに比べてこの地のひとは、ただうたわれるような経文に、身動きもしないで平和な表情で聞きいつているのみだ。ちょうどグレゴリアン・チャントに聞きいるトラピストの修道士のように。しかしモスクも炎熱のオアシスのなかでは、涼しい世界だった。そのみが、人を冥想にさそいこみ、祈りに挺身させる場所だった。その条件はこの南方仏教の寺院でも全く同じことだ、熱帯のなかのいこいと和らぎと安らいの場所として――。

ナショナル・ミュージアムも忘れてはなるまい。建物はまだ貧しく、採光も悪いが、すばらしい収集だ。多くの仏像はいうまでもない。各種の民具の豊富さ、スコタイ、サンカロークのすばらしい陶磁器、武器の類、多くのワットから集められた経典、什器の類など、とにかくところせましとならぶ大収集に、私はただつかれたのだった。

6月5日、クアラルンプールに飛ぶ。空からみるマライ半島はいちめんの暗い緑。ところどころに白茶けた地肌がみえるのは、錫山だろう。雲が去来して海はけぶったようだ。そこからはげしい熱気がわきおこるよう。しかし自動車がクアラルンプールの町に入っても、いっこう別の国にきた感じは起こらない。商店の看板にめだつのは、バンコックと同じく多くの漢字だ。華僑の店の連続。東南アジアの軸心となって連続

性を保つ華僑の存在がまざまざと感じられる。華僑、そして彼等によって代表されるシナ文化はずっと連続する。そしてその間にタイ、マラヤの文化が辛うじて残存している感じ。そしてその夜の宿もやはり華僑の宿。あたり一帯はすべてシナ町だ。芝居もみんなシナのもの。「トム・ジョーンズの華麗な冒険」がかかっている。訳して「風流公子」。そして三船敏郎演ずるところの「大海賊」の映画は、「サムライパイレーツ」と訳されて満員札止めの盛況だった。シナ町の夜はおそい。

連邦博物館——建物の形式は例のネグリ・スンビラン州に残るミナンカバウの家を模したものだ。屋根の棟がぐっと弓なりに両はしにそりあがるあれだ。外壁いちめんにはマラヤの歴史が壁画で現わされている。茶褐色を主調とした大きな壁画は、つよい外光のなかで、なかなか印象的である。収蔵品は民族学関係が多いが、とにかくマラヤの文化史を簡単に分かせてくれるのは有難い。最古のマラヤのイスラム碑文はヘジラ暦702年(1303 A.D.)の銘のあるもの。トレンガヌ州のテレサート河畔で、今世紀の初めに発見されたものだが、それも今はここに列べてある。Sri Taduka Tubanなる者が建てたもので、表面にはイスラムの戒律を記す。インドネシアからの影響であった。美しいクリス剣も多い。あの波打つクリスの刃はいったい何によって着想されたものだろう。むかしのシナ書は火焰刀と記録した。3, 5, 7という奇数でゆれている鋼鉄の線は、たしかに神秘的匂いをひそませる曲線だ。

マラヤには今も少数のネグリート、サカイ、ジャクウ等の原始民族が住む。彼等が今も用いるさまざまの民具もよく集められていた。長さ2mにも及ぶ名高い吹矢もあった。イポーと呼ばれる毒をつける軽快な毒矢、また弓、楽器など、自然の児たちの工夫がしのばれるいい収集だ。

夜のホテルのテレビではブラームスが鳴っていた。この地のテレビは4種の時間をもつ。マラヤ語、英語、タミール語、シナ語。それはそのままこの地の複雑な民族構成を意味するものだ。シナ人44%、マラヤ人42%、インド人10%、あとその他という構成がそのまま反映したのがこのプログラムなのだ。ホテルの向こうはクアラルンプールの停車場。1日数本しか動かない汽車の汽笛が時折、さびしく鳴っている。イスラム風

の尖塔とドームはコバルト色に塗られて、夜になると照明されて青白く浮かぶ。それをかすめてスコールが来る。そしてふるきヨーロッパの残照のような、ホテルのロビイはしずかだった。

しかし、そうしたイギリスの名残りの建物の間に、今新しく建設されているのは、どれも前衛的な建築ばかりだ。国会議事堂を中心とする政府諸官庁の建物、広大なマラヤ大学の建物のどれも、現代建築のパターンブックをおちまけたように、多彩な前衛性を発揮する。たとえ現在政治権力はマラヤ人の手中にあっても、経済の実権はすべて華僑に独占されている。とすれば、この国家の伝統文化とはいったいなんなのだろう。単純な民族文化をこえた総合的な文化とは何だろう。そう問いかけてゆけば、答えはもはや普遍的、抽象的な前衛性にしか求めることができない。マラヤ大学にはもちろん国教たるイスラムのモスクが金色のドームを空に光らせる。しかし、その塔のもつ曲線は、もはやモスクの塔の線からはみ出している。さらに12億を投じて建設中のナショナル・モスクは鉄筋コンクリートの壮大きわまりないものだ。しかもその屋根はついにドームを捨て去って、ちようど傘を半ばつぼめたような、鋭い波型をきざんだ屋根となっている。こうした前衛性のなかに未来のイメージを求めようとするその姿は、ほかの地でいくらもみられた。クワンタンの新しいモスクは、首都のものとは反対にほとんど半球を地上に伏せたかと思うほどドームを強調したものだ。そして壁は低い。こうした新しいモスク建築が、ことごとく勇敢に伝統的なモスクのスタイルから脱却しつつあること、それは多彩な民族構成に苦しむ新興国家が、統一を求めるイメージをえらびとった姿として考えさせられるものだった。

6月12日、マラッカ。沿道はことごとく深いゴム園。ヒンズー教の寺院が、奇怪な表情と色彩に富んだ姿をその間にみせる。そしてマラッカは歴史の町だ。三宝亭、宝山寺、古い城門、要塞のあと、オランダ東インド会社の遺跡、ザビエル教会等々。どれもこの地をかすめ去ったいくつかの勢力、いくつかの文化の流れの痕跡だ。そして今も厳然として連続性を主張するのは、華僑のみである。

クアラルンプールからゲマスを経てコタバルに至る縦貫鉄道は1931年に完成した。これによって西海岸と東海岸は、はじめて完全に結ばれた。所要時間22時

間、1等寝台車で68ドル50セント。

夜、8時30分、汽車は動き出した。窓の外にいちめにひびくのは虫の声。ほそい月が中天にひっそりとかかっていた。窓の外は全くの暗黒、それは深いジャングルやゴム園がつらなることを意味する。灯の光はひとつもみえない。そしてたまに明るい灯がみえると駅とちいさな町。駅長は純白の折目正しい制服を着けて荘重だった。窓からふきいる風は夜がふけるにつれてようやくつめたい。

8時ごろめざました。窓の外は相変わらぬジャングルの連続。そのなかに折々そまつな小屋が点在してみえる。いわゆる原始民族の住居でもあるのか。

パハン河がみえはじめた。河にそうて水田が開け、水牛もいる。農家はすべてニッパ椰子で屋根をふき、貧しげな風情だった。華僑の姿はしだいに減ってゆき、ゴム園のインド人の集落、マラヤ人の村がいくつもみえてくる。サロンをまとい、はだしの姿も多い。誰も彼もじっと走りすぎる汽車を見送っているだけだった。

コタバルの対岸に着いたのは午後の4時半。コタバルまでフェリー。泥にごりしたパハン河を渡る。小さな舟で漁をする男が二・三見えた。長い柄の先につけた網でしきりに魚をすくいあげる。小雨がふっていた。河の面はうすねずみ色に夕方の色である。しずかな河の夕暮。漁舟はすこしも動かない。

私どもがクアラルンプールを出たその夜、ミス・マレーシアのコンテストが行なわれたはずだった。各州から選ばれたミスたちが、いく人も私どものホテルに泊まりこんでいた。この国の民族構成をそのまま反映して、ある人はマラヤだった。あるものはシナ人だったし、あるミスは混血風のスタイルだった。いったいこうした土地での美の標準は何なのだろう。いわゆる8頭身美人は、ローマのウィトル・ウィウスが、その著書「建築書」のなかで与えた、人体美のカノンにすぎない。それはギリシャ・ローマ系にのみ通用した標準だったのだ。

ある日このひとりといっしょになった。大きな眼と浅黒い皮膚。もちろんマラヤだった。面長で黒く長い髪。しかしずいぶんやせだちだ。「あなたの幸運を祈る」「ありがとう」。しかしコタバルでみた新聞の結果では、この少女に幸運の女神はほほえんではいなかった。1位はミス・セラングール、ヨーロッパ系。2

位はミス・シンガポール、3位はペラク、ともにシナ人。マラヤはついに選ばれなかった。ミス・セラングールも私どものホテルにいた。ぽっちりした眼の、小柄のひとだった。いつもグリーンを着けて、余りめだたぬ人だったが、やはり美しいと私は思っていた。だがその美しさは、すでに私どもがみなれた西歐的な美しさだ。この熱帯の匂いにつつまれた美しさではない。そうした意味で、私は数のない浅黒いマラヤの少女たちの幸運をねがっていたのである。

コタバル、この東海岸のタイの国境に近い所に来て、私ははじめてマラヤに旅して来たと思った。漢字の看板は表通りから退き、マライ語の看板が大きくかかげられていた。町にシナ人の姿はほとんどなく、マラヤ人がのびやかに歩いている。英語はほとんど通じなくなり、私どもはうろ覚えのマライ語で用を足さねばならなくなった。

日中のコタバルの町は白くもえるようだった。ひっそりとした町なみ、そのなかに名高いコタバルの銀細工の工房がいくつもあった。明るすぎる日光と暑熱をさけて工房は薄暗く、10人にもみたぬ工人たちが、だまって仕事をつづけていた。その工房に無遠慮に入りこみ、カメラを向けるこの異邦人に、彼等は黙ってにっこりと笑いかけ、また眼を仕事に当てるのだった。その視線、その姿はどれも私がいく人もなれ親しんだ日本の職人たちと全く同じ表情の動きだった。

鑄こみ、打ちだし、ろうづけによる銀線細工、タガネによる切り出し、すべての技法がここでは自在に扱われて、デリケートな細工物がいくつもつくり出されている。ただ鑄型に cuttle fish の骨を使っているのが珍しい。それに水牛の角をたくみに組み合わせた仕事も多かった。ろうづけは borax だという。

とある道ばたの家の前庭には、花やかな色彩がぎっしりとつまった、パチックが干されていた。それは花壇のように、熱帯の花のように華麗だ。木枠に張った布に、老婆がひとり筆を動かしている。伝えられるチャンチンの使用は見られず、粗末な小型の筆が彼女の唯一の道具だった。そしてまだあどけない顔立の少年が、しきりに布を張ったり外したりして手伝っているのである。

しかし、この地のパチックはやはりインドネシアのものには劣る。インドネシアのそれは表裏からろう描きして染めるために、出来上りはほとんど表裏の区別

がない。しかし、マラヤのバチックは一面からしかろう描きしないので、文様にはっきりと表裏がでてしまう。そのためにマラヤものは、インドネシアのバチックに比べて、5分の1という安値で取引きされている。

この市場は巨大なものだ。一方は野菜や果物や魚などの生鮮食料品。一方は保存のきく食料品や米など。市場のなかは人と品物でうずまっている。そこに熱帯の西日がまっかに差しこんでいた。濃い原色に染められたサロンの女たちがいっぱい群らがる。夕暮が近づくと、店は閉じられはじめ、売りあせる人の声がいっぱいにこだまする。バナナの黄色がそのなかでことにあざやかに輝き、薄暮の空気を熱っぽいものに染めあげている。この地の真鍮細工もすぐれている。むぞうさに打ち出されたスプーンや sireh 用の道具などのけずり出した器など、どれも素朴ないい味わいをもっていた。

ほとんどの商店がしめてしまった夜にも、映画館だけは明るかった。プレスリーの「アカプルコの日」がかかっていた。訳して「桃源青春」。レストランでは若者たちや家族づれが盛んに出入りし、食事をし、かき氷を食べる。かき氷はマラヤ中どこにもある。全く日本風のものだ。そのなかにまじって、私どもとマラヤ産のアンカー印のビールを飲んでた。ややつよいビールの味がしみるよう。コタバルはまことに生き生きしたマラヤの町だった。

コタバルからトレンガヌへ、ひたすら海岸ぞいを南下する。ここにも多くの水田が開けていた。そして水牛の群。その向こうにはジャングルの緑。椰子が空にすっきりとのびて、ふかい樹林をつくっている。海はまばゆいばかりにきらきらと光っていた。漁夫のちっばけな家が点在する。だがほとんど人影はみえない。静寂の道だ。灰色の舗装道路が、私どもの眼の前を無限のように空にのび、またうねうねと屈曲してやがてジャングルのなかに消えてしまう。そこを折々さまざまいうなりをあげて自動車がすれちがう。そして一瞬の間に、どれも視界から立ち去ってしまう。

トレンガヌ、ここもきびしい暑熱の町だった。宿はここでは華僑の経営、レストランはがらんとしてほとんど人気もない。ここもやはり英語は通じない。筆談だ。漢字で。結局文字の交流がいつう確かなのだろうか。経営は華僑だが、使用人はマラヤ人とシナ人。

浅黒い大きな眼の女がやってきた。大きな金の腕環。うすもののサロンはいかにも涼しげである。

この地はコタバルとならぶ東海岸の漁港だ。夕暮れの海には落日がまっかにもえていた。この地特有の、あのすっぱりと斜めにへさきとともに切り落したような型の舟が、いくつも浮かぶ。その向こうにながく岬がのびて、椰子の木立が逆光をあびてくっきりとめだつ。海岸の護岸には、町のひとつとがあちこちに腰をおろして、海風に吹かれていた。心地よい風がほほをかすめて背後にながれてゆく。大きな魚市らしい建物もあったが。しかしそのなかはもうすっかりしずまって暗かった。銃眼を残した古い砲台のあと。それも今は使われぬとみえて、住宅と化している。モスクの古雅なほの白さ。

トレンガヌからクワンタン、134マイル。これも全くの海岸の道。漁村が左に点在するばかり。どの家もニッパでふいたさびしいものだ。その合い間にココ椰子の茂み。だがこのあたりも人は少ない。そして坦々とした道が、きれいに舗装されてはるかにのびているばかりだ。西アジアの砂漠の旅と同じこと。あるものはただ植物にみたされたように連続した緑色の空間ばかりである。そのなかに風防の垣をめぐるして、じつと自然の圧力に耐えて生きている人たち。それも荒涼とした砂漠のなかの、小さな島のようなオアシスのなかにむらがって、身をよせあうように暮している人たちと同じ表情だった。

クワンタンも寂しい港市だった。しかしここはもうクアラルンプールと半日で結ばれる。そのためであろうか。町の主部は漢字の看板にみたされはじめていた。さまざまな船具、海産物を売る店がならぶことは、いかにも港市らしい。夜、ホテルで新聞を開く。新潟地震の報をみた。漢字はいかにもショッキングにその惨状を訴える。いつかも西アジアを旅しているとき、私どもは伊勢湾台風のニュースを聞いた。こうして異郷にあるとき、故国の被害のニュースはなんとなく心をいたませる。「英狂人楽隊」の文字があった。例のビートルズ4人組のことだ。ビートルズの動きはしよっちゅうクアラルンプールのテレビで報道されていたものである。

6月18日、朝8時にクワンタンを出発。車はまあたらしいベンツ。なかなかよく走る。この国でもベンツ、フォルクスワーゲンの人気はやはりすばらしい。

日本のトヨペットやブルーバードもずいぶん使われているが、セカンド・プライスが問題にならぬくらい安くなってしまうという。それでもマラッカゆきの車の運転手は盛んにブルーバードをほめた。もちろん私もへのおせじもいくぶん含まれていたろうけれど。海外にいと、人間誰しもちよっぴり愛国者になるものだ。

道はマレー半島の中央の山地を東西に横断することになる。深いジャングルをうねってつけられた道はなかなかの難コースだ。それでも舗装はいいし、ひどい蛇行の道は切りとってつけかえる工事があちこちで進行している。さすが山地に入り、雨もよいの日だけあって、久しぶりでずいぶん空気が窓から流れこむのだった。ふかい森の底には、河の瀬音があらびて鳴っている。

私に与えられた旅の日数もう半ばを過ぎてしまった。残る日数で北方に旅し、米作地帯のなかに調査のフィールドを早く決定せねばならない。そうして6月20日、私どもはイポー路を北へ、車を走らせたのである。

暑い日だ。クアラルンプールを出はざるといきなり白い荒涼とした地に出る。錫山なのだ。強い真昼の太陽に照らされて、その白い土地はなにか砂漠の只中のようにさえ思われた。マラヤの特徴は白い土と緑のジャングルの2色に染め分けられているとっていいのかもしれない。それほど、このイポーを通過してペナンに向かう道路の左右は、ゴム園とジャングルと、むきだしとなった鋳鉱山が交代に現われる。南米のポリビアとならんで世界の2大産地であるマラヤの錫。これは単純な鋳業だ。水で洗い流した土砂のなかから、比重差で錫を分離するだけのこと。日本の砂鉄採取業者が、「かな流し」と称して、かつて中国地方で盛んに行なったものと同じ原理、同じ方法である。しかし、これは土地を荒廃させる。首府クアラルンプールもそうした荒地に開かれた町なのだ。この掠奪産業がマラヤの自然景観を今後どのように変化させてゆくか—あの白い土の領域は、これからのちどのような姿となってゆくのだろう。

イポーあたりから右手には、巨大な石灰岩の岩壁がつらなりはじめる。そして大きな洞穴がぽっかりと開く。そのひとつに三宝洞と呼ばれる仏教寺院があった。明の三宝太監鄭和に因んだものという。清朝末の

開窟らしい。しかし私を驚かせたのは、十数年前から開かれ、今も建設がつづいている霹靂洞だった。霹靂は Perak に当てた字。

大きく深くのびる洞穴のなかには、また巨大な仏像が安置されていた。その光背が電灯で組みたてられ、明々と輝いているのは何となく微笑をさそう。洞穴のなかにはいくつもの道が開かれ、至る処に金色の仏像が奉獻され、また白い石灰岩の壁には、いろんな壁画が画かれていた。ことごとくイポー附近で錫で巨利を得た華僑たちの寄進である。

そのなかで「南島敦煌」という字もあった。あの西域へのルートにあった敦煌の千仏洞も、こうした発生をもったのだろう。敦煌の建設者はシルクロードによって利益を得た貿易業者たちだった。それと同じ事情が今もくりかえされている。

老人たちも、サングラスをかけほそいスラックスをはいた当世風の若い娘たちも、みな線香を抱えて洞内を巡拝してゆく。ひろい洞内にはちよつとした喫茶の設備もある。そこで人びとはのんびりとつめたいものをすすったりしていた。大きな鐘が鳴らされ、洞内にすさまじい反響を呼ぶ。

敦煌もオアシス都市のひとつだった。そしてやはり洞穴のなかに多くの仏像や壁画が安置された。しかも何よりも洞穴のなかは涼しいレクリエーションの場である。焼けつくような砂漠や熱帯の太陽の光からのがれて、このほの暗く涼しい広大な洞内に入り、至るところを埋める極彩色の壁画や、金色に光り輝く仏像を仰ぎみると、そこは間違いなく浄土の世界であらう。インド、あるいはアフガニスタン、また中国と発達した多くの洞穴寺院は、きびしい自然のなかからのがれ、心地よい浄土世界を現実のものにしようとした知恵にちがいない。そしてここ南島には今も新しき敦煌が建設されている。

しかもそこには国家を背景とするイスラム、またモダンなモスク建築に対するひそかな対立感がふくまれているようだ。マラヤ人と華僑、政治と経済、こうした対立が、宗教というシンボルによって争われているのだ。国費を投じて建設されるモスク。華僑の寄附だけで造られ拡大してゆくこの種の洞穴寺院問題は深刻である。

夕方、ペナンに入る。自由港ペナンの町の夜はたいへんな賑わい。ここもまた華僑の町だ。そして近郊に

ある極楽寺は、やはりシナ人たちがいっぱいだった。多くの奉獻仏、寄進された建物、はなやかな壁画、美しいパゴダ、どれもあの洞穴寺院のように、シナ人たちの精神的な連帯感の中心となっているものばかりだった。若い青年たちのアベックがいっぱいだ。盛んに写真を取り、賑やかに歩きまわる。ここで彼等はひとしく同胞意識、民族意識を新にし、またふりかえっているように思われる。

ペナンからさらに北方ケダー州の首都アロール・スターへ。そこからさらにアロール・ジャングスへ。そしてようやく調査予定地はきまった。村の中央を一条の水路が流れる。その両側にずらりとならぶ農家群。その奥にひろがるのはことごとく水田ばかり。米作単作地帯のささやかな農村だった。しかし、ここにも華僑の商店がいくつも進出しているのだった。

村には病院もあった。ひとりの医師がそれを切りまわす。パイプをさかんにふかしながら彼はマラヤの後進性、教育の普及のおそいことを歎息しつつけていた。いささか世をすねたようにみえる彼の姿勢は、日本の村をたずねるとしばしば出会う村の老医、その村の指導的な知識人として、しかもたえず中央と比較しないではいられない人たちのおもかげを思わせた。

平和な農村だった。白い帽子をかぶったハジたち、村の長老は毎朝のように村の入口のコーヒー店に集まっている。そこでコーヒーをすすり、談笑のうちに閑雅な時が消えてゆく。英語はほとんど通じない。けれども村のひとたちの眼は、ふいに入りこんできた異邦人たちを、好奇の眼でみつめるとともに、人のよさそうな微笑をたたえるのだった。木造のささやかなモスク、その裏は墓地となっている。名も記されていない小さな墓石が草むらに埋もれている。この熱帯の太陽のなかで、ただ水田をつくりながら一生を終えていった多くの人たちの安息の地がそこにあった。土に帰り、土に帰してゆく人たち、人生とはそういうものなのだ。そういう寂しい歌にみちたものなのだろう。

だが、私どもがこの村にたどりつくまでには、ずいぶん多くの人々の尽力があった。偶然クアラランプールで同宿したアジア経済研究所の萩原氏の、まことに厚意にみちた忠告があった。そして農務局長のジャミール氏が、このアロール・ジャングスを推した。それを実見するための私どもの北方の旅には、バタワースに住み、ブキメラの試験場でマラヤの稲の育種に努力

してられる、佐本氏のたいへんな援助があった。佐本氏はマラヤの米作における2期作用の品種を固定されたひとだ。みごとな成功。その品種は「マリンジャー」となづけられている。マラヤ、そしてインジャヤ、ジャポニカの名が組み合わされて生まれたものだ。こうした日本人技師たちの、ほとんど故国にも知られていない血のにじむような努力が、マラヤの日本に対する信頼を生む根本的な要素であることを、いったい誰がはっきりと認識しているのだろうか。

その佐本氏によって私どもはケダー州の農務部長の援助を受けることができた。そして、ジャミール氏が推したアロール・ジャングスの村に足をふみ入れたのである。ひとつの村の選定はそう簡単に進むものではない。多くの現地のひとたち、また多くのパイオニヤーたちの仕事があってこそ、はじめて新しく来た者も異郷の地に自分の求める条件にかなう村を得ることができる。アロール・ジャングスは当初考えていたよりもやや戸数が多いようだ。しかし、その他の事情は日本の米作単作地帯の村に、いくぶん似たところがある。はじめての調査者たちも親しみ易いだろう。

だが同じ北部の米作地帯といってもずいぶんの違いがある。ペラ州ではもう2期作は75%の普及率だ。ちょうど出穂期に当たった田は、穂を風になびかせていた。しかし一歩ケダー州に入るとここは単作地帯、田は盛んに水牛が曳くスキでうなわれている。あるところでは種子まき、あるところでは田植え、仕事のピッチは必ずしもそろっていない。その幅は一月ほどもあるということだった。

この地方の田植えはククカンビンという一種の田植器を使う。みじかい鉄の棒の先が二又に分かれ、そこに苗をはさんで使うという。アロール・スターの町で金物屋に入ってきいてみた。すぐ出してきてくれた。25セント。それに手中にもって使う小さな手鎌もほしいと思った。パイサウというはず。しかし出してきてくれたのはふつうのノコギリ鎌だった。もうパイサウは使わないと。その店には鎌や鉄製のスキ先や、椰子の実を割る道具だとかさまざまの農具が山のように積まれてあった。日本の農村の近くの町の農機具屋と同じ風景である。

アロール・スターのモスクは、クリーム色の壁と、黒い屋根の対照がなかなかいい。その前はいちめんの広い芝生、いくつもの大きな老樹がゆったりと枝をの

ばし、葉を茂らせている。夕暮れのモスクには、うすいヴェールをまとった女性がいっぱいになり、コーランの読誦が、広場の芝生をながれていった。芝生に腰をおろしてじっと動かないひとも多い。家族づれの散歩のひとたち。またフットボールに興ずる少年たち。それはしずかで、しかも平和に時間が消えてゆく地方都市の点景だった。タバコを吸う人の火が赤々とみえる。ふりかえると町には灯がきらめき、背後には夜の空が暗かった。このおだやかな空気と時間とそれはあわただしい暮しに追いまかれる私どもの日々の塵労からは、遠い世界の像だった。そうした芝生のひとときを私どもはいつもつものだろう。

19世紀までの海外の調査や探検は、いつもあたたかい暖炉の火や、白く清潔で糊のきいたテーブルクロスのある生活を見ずして行なわれた。それは快適な生活から、辛苦の多い生活へ自から突入してゆくことだった。その彼等を支えるものは、ただ未知なるものを招き、未知なるものを世に示すという使命感にも似たものだったようだ。

しかし20世紀、ことにこの後半は、もはや海外調査はそうしたものではなくなった。ある場合にはそれはむしろ新しいぜいたくであるといっている。タヒチにのがれたゴーガンのように、この目まぐるしく煩雑な現代生活から逃れて、自然と人間がおだやかに調和している暮しの世界にどっぷりとひたろうとする願いが、むしろ今日の海外調査者の心の支えとなっているのではないか。ここには空をおおう煤煙もなく、スモッグもなく、交通戦争もない。こうさくどこまでも私どもを追いかける電話のベルもなければ、たえずせきたてられるような周りのはげしいスピードも眼に映らない。

しかも、かつての調査者たちが苦しんだような条件はほとんど消えてゆこうとしている。マラリア予防も1週間に1度の服用ですんでしまう。10年前の西アジアの旅のころはキニーネ一点ばりだった。あのがい錠剤を私どもは毎日のみつづけていた。それでもなおマラリアには十分に安心するわけにはいかなかった。

さまざまな日用品だって、新しい改善と改良が無限になされて、私どもの近ごろの装備は、19世紀ごろの人々とは比べものにならぬ完全さとなっている。しかも、交通機関の発達は、多くの肉体的な負担をはるかに軽くしてしまった。今日の海外調査者たちは、ほとんど国内にいるのと変わらない生活条件のもとに働くことができるのだ。その上に日常の多くの些末な事はいっさい彼の肩からとりのぞかれてしまう。現代の海外調査は、煩雑から単純に戻り、人間的な生活に帰るぜいたくなチャンスといえるかもしれぬ。早い話、私だってこの8月からふたたび西アジアに向かう。そして私はこの秋のオリンピック、日本のマスコミがいっせいに騒ぎたてるであろうあのすさまじい騒音から逃れうることを、ひとつの幸福と考えている。スポーツという人間の生理的な闘争が、最高の神のように日本に君臨する期間に、日本にいないことを幸福と思う。そしてある友人は私にいった。「たしかに、それは最高のぜいたくだらう」。

旅路のはて、シンガポール、この博物館は見事な収集だった。かつて中国から南方へ輸出された明・清の染付の大量が、ガラスケースのなかで、しずかに過去の歌を奏でている。そしてボルネオやスマトラ、マラヤの民具の多くがきれいに整理されて、壁面やケースを飾る。窓外からは多くの教会の尖塔がみえて、かつてのイギリス時代をしのばせた。

海はおだやかに暗かった。てい泊する船の灯が海面いっぱい広がってきらめいた。岸壁にひたひた寄せる波、海岸道路を疾駆する自動車のライトが、まばゆい光の帯となる。しかしそのなかをゆきかう人たちは、ことごとくシナ人。シンガポールの人口の85%は華僑である。そして連邦政府とシンガポール政府の対立は、連邦の大きな問題である。その問題はすべてこの華僑たちのもつ巨大な経済的機動力から生まれてきているのだ。

そうして6月30日の深夜、私は水田に立っていた。あわただしく過ごした1か月の日が潮騒のように頭の奥に鳴っているのを感じながら――。

(1964.7.20記)